

神の国を待ち望む*

鈴木寛†(教会員)

聖書：

ここに、ヨセフという議員がいたが、善良で正しい人であった。この人はユダヤの町アリマタヤの出身で、神の国を待ち望んでいた。彼は議会の議決や行動には賛成していなかった。この人がピラトのところへ行って、イエスのからだの引取り方を願い出て、それを取りおろして亜麻布に包み、まだだれも葬ったことのない、岩を掘って造った墓に納めた。この日は準備の日であって、安息日が始まりかけていた。(口語訳：ルカによる福音書 23:50-54)

讃美歌： 讃美歌 234A

1 はじめに

1.1 問い・答え

皆さんには、長い間持ち続けている問いがありますか。

私は、数学を研究しています。数学では、分からないことばかりです。その中で、多くの人が考えても分からない問題を未解決問題と言いますが、私自身が何年間もずっと考え続けている未解決問題もいくつかあります。

私が、聖書に書かれている真理を求め始めたのは、高校生の頃ですが、その頃から持ち続けている疑問、問いがいくつかあります。

*国際基督教大学教会主日礼拝, 2008年8月17日

†Email: hsuzuki@icu.ac.jp

‡URL <http://subsite.icu.ac.jp/people/hsuzuki/>

そのうちの一つは、マタイによる福音書 5章 20節の

わたしは言うておく。あなた方の義が律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、決して天国に入ることはできない。(口語訳 マタイによる福音書 5章 20節)

についてです。

聖書を読み始めて、最初に牧師先生に質問したのがこの箇所でした。先生の答えを正確には覚えていませんが、おそらく『律法学者やパリサイ人の義』とは本質的に異なる義、すなわち、自分自身の行いによる義ではなく、神様の義によらなければ、天国に入ることはできない。」と言われたのではないかと思います。

みなさんもお存じのように、律法学者やパリサイ人は福音書ではいつもイエス様に批判される側、簡単に言うと悪役として登場します。これでもか、これでもかというほど。

神様が与えられた律法を完璧に守ろうとした律法学者やパリサイ人たちですが、福音書を読むと、たしかにイエス様が指摘されているように、的はずれな部分があることはわかります。しかし、それでは、イエス様を救い主と信じる私たちの信仰による義は、本当に、律法学者やパリサイ人の義と本質的に違うとすることができのでしょうか。

問いの中には、答えが得られた、またはヒントが与えられたものもあります。たとえば「あと1ヶ月の命だと言われたらあなたは何をしますか。」という問いです。

私が高校時代いつも学生服のポケットに入れていた小型の新約聖書にはたくさんの書き込みがありますが、そこに

「あす天地が滅びてもわたしは今日りんごの木を植える by マルティン・ルター」

と書いてあります。実は、だいぶあとになってルーテル神学校の徳善義和先生の教会史の授業を聞いたときに、この言葉が紹介され「これは、ルター的な言葉だが、文献には残ってはいない。」と言っておられました。徳善先生は、ICU 教会でジョイフル・リンガースを指導しておられる徳善（義昌）先生のご兄弟です。徳善義和先生は、ルター研究の専門家ですから、先ほどの言葉はルターのものではないのかも知れません。

ちょっと脱線しましたが、私が高校生の時に得た答えは「あと1ヶ月の命だと言われても、『私は今と同じ生き方を続けます』と答えられるような生き方をいつもしていく」こと。「あす天地が滅びてもわたしは今日りんごの木を植える」と言えるような生き方をすることです。

しかし私にとって「りんごの木を植える」とは、どのような生き方なのかはまだはっきりしていません。

1.2 聖書の会

2003年の春学期から、学期中だけですが、毎週一回夜7時半から9時、学内住宅の我が家で聖書を読む会を持っています。出席者が私以外に一人だけということも、何回かありましたが、2年ほど前から、毎回、大学の学内ホームページに「お知らせ」を出すようにしている関係でしょうか、最近は毎週10人近い人たちが来てくれています。

この会では、聖書の一章を2回から4回ぐらいで学び、私があらかじめ、質問をいくつか用意しておいて、その問いについて一緒に考えながら学んでいく形式を取っています。疑問がたくさん出て、議論となり、まとまらないときも、私が断定的なことは言わないようにして、疑問は疑問として残し読み進めるようにしています。時間をかけ、問いを持ちながら、聖書を読み進めて欲しいと願っているからです。

この会は、私自身にとっても、出席者の発言を通して新しい発見をしたり、教えられたり、新

たな問いを持つ機会にもなっています。

最近、日本語を母語としない学生も複数参加し、また、海外からのお客さんが続いたこともあり、日・英両語の橋わたしが精一杯になることもあるので、わたしがまとまったコメントをすることは、減っていますが、毎週、何人かの方々と考えながらじっくり聖書を読む時を楽しんでいます。

節子さん（わたしの妻のことですが）がいつもおいしい紅茶やケーキなどを用意してくれまので、もしかすると、聖書よりそちらを楽しみに来ている学生さんもいるのかも知れません。

先学期にはこの会も100回を越えました。先日天に召された尊敬する斎藤和明先生が続けておられた読書会に比べると、10分の1にも満たないと思いますが、これからも聖書を一緒に読むことを通して、問いかけ、チャレンジを、学生さん達と共に受ける場として続けていきたいと願っています。お祈り下されば幸いです。

聖書は、ここ何年か、ルカによる福音書を読んでいます。今は最後の24章に入ったところです。通常は2回から4回で一章を学んでいます。23章は、7回もかかりました。今日は、その23章の最後に出てくる、アリマタヤのヨセフについて考えてみたいと思います。

2 アリマタヤのヨセフ

2.1 概略・聖書から

今日の聖書の箇所を見てみましょう。

イエスが、十字架上で死なれた時、ヨセフという議員がピラトの所に行き、イエスの体の引き取りを願い出て、十字架から降ろし、亜麻布にくるみ、まだだれも葬ったことのない、岩を掘って造った墓に納めた、という記事です。

聖書には、ヨセフという名前の人が、他にも何人か出てきますから、区別するため、ここでは、「ユダヤ人の町、アリマタヤの出身のヨセフ」となっています。

アリマタヤのヨセフのことは、聖書では、イエスの埋葬の箇所には登場しませんが、4つの福音書すべてに記録されています。それぞれ

の違いを比較するのも一つですが、ここでは、4つの福音書の記事を紡いでこのヨセフについてまとめてみましょう。

ルカによると、ヨセフは「議員」であり「善良で正しい人」と表現されています。また「神の国を待ち望んでいた」。さらに「議会の議決や行動には賛成していなかった」とあります。これは、「イエスを捕らえ殺すことには賛成していなかった」ということを意味しています。

しかし、マルコによると議会では全会一致でイエスの死刑を決めたと書いてありますから、字義通りにとると、ヨセフはそこにいなかったのか、いずれにしても、その決議に対しては記録されるに値することは何もできなかったということになります。

マタイには、ヨセフは「金持ち」だったと書いてあります。城壁に囲まれたエルサレムに「誰も葬ったことのない岩を掘って造った墓」を持っていたことだけからも、十分そのことをうかがい知ることができると思います。

また「この人もイエスの弟子であった」とあります。しかし、ヨハネを見てみると「ユダヤ人をはばかって、ひそかにイエスの弟子となった」となっています。新共同訳では「イエスの弟子でありながら、ユダヤ人たちを恐れて、そのことを隠していた」となっています。民の指導者たちはイエスを殺す相談をしていましたから、ユダヤ人の社会で身分の高い金持ちの議員が、イエスの弟子だと公言することは、とても難しかったのでしょうか。

マルコによると、ピラトの元に行った次第について「大胆にもピラトのもとに行き」と書いてあり、新共同訳では「勇気を出してピラトのところへ行き」となっています。

イエスが十字架に架けられ死んだのは金曜日の3時頃でしたから、ユダヤ人の暦で安息日の始まる金曜日の日没までには、埋葬を終えなければならなかったのでしょうか。季節は春分の頃ですから、日没は6時頃でしょうか。ヨハネによると、「イエスの死体を取り下ろしたいと、ピラトに願い出た。」となっています。

もし人が死にあたる罪を犯して殺され、あなたがそれを木の上にかける時は、

翌朝までその死体を木の上に留めておいてはならない。必ずそれをその日のうちに埋めなければならない。木にかけられた者は神にのろわれた者だからである。(口語訳 申命記 21 章 22-23 節)

と申命記 21 章 22-23 節にありますから、そのままにしておくことはヨセフにはできなかったのでしょうか。

みなさんは、このヨセフについてどう思われますか。

2.2 神の国を待ち望んでいた

今回この箇所を学んでいて、私にとって特に印象的だったのは、今日のタイトルにもした「神の国を待ち望んでいた」という聖書の記述です。

ルカには似た記述があと二回出てきます。二回ともイエスがまだ赤ちゃんの時にイエスを祝福したシメオンとアンナの箇所です。「エルサレムの慰められるのを待ち望んでいた」(ルカによる福音書 2 章 22 節)「エルサレムの救いを待ち望んでいるすべての人々に語り聞かせた」(ルカによる福音書 2 章 38 節)として出てきますが、他にはありません。他の人は神の国を待ち望んでいなかったのでしょうか。

救い主、メシヤを待ち望んでいたのは、その当時のユダヤの人たちすべてだったのではないのでしょうか。律法学者やパリサイ人も問われれば無論「メシヤを待望している」と答えたでしょう。

聖書において神の国と神の支配は殆ど同義語だと言われています。ルカで「神の国を待ち望んでいた」という言葉をアリマタヤのヨセフだけに使ったのは、皆、「自分が救われることは望むが、神様の支配を本心から望んではいない」ということなのではないのでしょうか。

自分が望むような状態になることが救いだとしたら、そのように望む人は多いけれども、神様が望まれるようになることを心から待ち望む人は多くない。そして、このヨセフは「神の国を待ち望んでいた人だ」というのです。

ヨセフはイエスに期待していたことでしょうか。しかしそれを公言はできないでいた。そして、イエスの裁判においても何もできなかった。そし

て、いままさに十字架上で息絶えたイエスを前にして、ヨセフは絶望のどん底にいたのです。後悔もあったかもしれませんが、しかし、まったく希望を失ったまさにその時に、勇気を振り絞って、イエスの死体を十字架からおろし葬る許可をピラトに願い出たのです。

金曜日の夕方、過越の祭りの期間ですから、もしかするとこの晩、家族や一族郎党との過越の食事を控えていたかも知れません。すぐ種なしのパンの祭りがはじまりますから、その準備の責任もあったかも知れません。そんなときに、死体に触れて汚れたものとなる。有力者として評価がどうなるか、不安もあったでしょう。しかしそのようなことはかなぐり捨てて、「大胆にも」この行動をしたのです。たしかにヨセフは「勇気を出して」信仰告白をしたのです。

しかし、考え方によっては、的はずれな行動にも映ります。議会で発言していたら、もう少しはやく行動を起こしていたら、なにか変わっていたかも知れない。さらに、復活の時には亜麻布はそこに残されていた¹とありますから、神様が為されたことを考えると実質的な意味は全く無いとも言えます。しかし、聖書は、この人こそ、「神の国を待ち望んでいた」人だと記しています。

2.3 わたしたちの信仰生活

私たちの信仰生活はどうでしょうか。私たちは、神の国を待ち望んで生活しているのでしょうか。

最初に申しましたように「わたしの義が律法学者やパリサイ人の義と本質的に違う」と私には言えなかったように、私も、神の国を待ち望んで生活しているのではなく、自分の望む救いを願っているのではないかと考えさせられています。

先日メッセージでエゼキエル書の

「人の子よ、ぶどうの木、森の木のうちにあるぶどうの枝は、ほかの木になんのまさる所があるか。(口語訳：エゼキエル書 15 章 2 節)

¹ルカによる福音書 24 章 12 節

が読まれました。私の信仰は律法学者やパリサイ人の義にまさるところなどないとも告白せざるをえません。

しかし、神様は、私のように、信仰がどこにあるのかわからないようなものであっても、その信仰告白を受け止めて下さるかたなのです。

私が高校生のころに行っていた教会に、いつも静かに奉仕をしておられ、あまり語ることをされない方がおられました。このかたがあるとき夜の祈禱会で証をされ、自分はいつもこの箇所から慰めを受ける、といいヨハネの黙示録 3 章 8 節を読まれました。

わたしは、あなたのわざを知っている。見よ、わたしは、あなたの前に、だれも閉じることのできない門を開いておいた。なぜなら、あなたには少ししか力がなかったにもかかわらず、わたしの言葉を守り、わたしの名を否まなかったからである。(口語訳：ヨハネの黙示録 3 章 8 節)

その方は、「自分は力はないし、立派な信仰といえるものもないが、わたしは、イエスさまを通して示して下さった神様に望みをおいている。弱い自分のことをよくご存じで、かつ、私の前に『誰も閉じることのできない門』を開いておいて下さる方だからです。わたしは少ししか力がなくても、イエスの言葉を守り、神様に信頼していきたいと思っています。」と言われたことがとても印象に残っています。

2.4 わたしたちの根拠

神様の国を待ち望む。正直、わたしも神様の国とは、神様の支配とはどのようなものか具体的にはよく分かりません。しかし、イエス・キリストによって示された神様。「いためられた葦を折ることがなく、煙っている燈心を消すこともない。」(マタイによる福音書 12 章 20 節) わたしが罪人であったときに、死んで下さったイエス様の愛をもって、神様が愛されている一人一人と互いに愛し合うように招かれているイエス様の愛に信頼することは、できると思います。

3 まとめ

わたしたちの日常の信仰生活は、ヨセフのように、殆ど毎回敗北。「勇気を出して」したことも、神様の国には役に立たない無駄なことばかりかも知れません。しかし、たとえそうであっても、自分に望みをおくのではなく、神の国を待ち望む生活に私たちは招かれているのではないのでしょうか。

そして、それは、何か、大きな決断のときに、体を張って大切な一票を投じることばかりでなく、自分で考えても、あまり重要そうに思えないことの中にも、わたしたちが、神の国をもとめて生きる、信仰に生きる道が隠されているように思います。

いつ死んでも良いように、その日を生きる生活は、具体的には良くは分からないけれど、自分は自分の好む救いを求めているのか、それとも、イエス様に信頼して、神の国、神の御支配、神の正義を待ち望む、主よ来たりませと願う生活を求めているかを問い続ける生活はできるかもしれない。神様はそのような応答を求めておられるのではないかと思います。

明日天地が滅んでも、神様に信頼して神の国を待ち望む信仰に生きたいと思います。

4 祈り

お祈りします。

天の父なる神様。

あなたは、わたしたちが信仰の無いものであることをご存じです。しかし、どうか、私たちが、あなたの御心になる国を待ち望む信仰をもつことができますように、アリマタヤのヨセフの勇気から学ばせてください。そして、少しでも、あなたの心をわたしたちの心とすることができるように、導いて下さい。

アーメン。